

たらなどと心配するようになった。

英語は遂にキングスクラウンを一冊読解し終えた。数学は不等式に入ったところで試験となった。

この年、二年の編入試験を受けた者は私の外に一人だけいたので二人で関城中学校第二学年編入試験を受験することになった。

四十年以上も前の事なので殆んど記憶も薄れたが、英語は一年生用の教科書、といつても新聞紙大の紙にA五判に印刷したものを各自がその大きさに切ってページ毎に綴じたのが当時の教科書であり、本などと言えた義理のものではないが、兎に角、それを読まされ、その意味を質問されたような気がする。記憶が曖昧なところをみると出来はよかったのであろう。と云うのは国語や英語の回答に対し、数学の問題は今でも明瞭に覚えていいるからである。と云っても問題の内容ではなく二十問中の十八問が因数分解の質問であり、残りの二問が不等式の問題ということ覚えていたのであり、当然のことながら因数分解の十八問は正解であり、二問は回答不能であった。

この時、私は滋司という奴は凄いと感激した。どうして彼は因数分解の問題が出るのが判ったのであろうか。いずれにせよ、これで合格確実と確信できた。

私の合格確信は確実のものとなった。三月の末頃に晴れて合格通知が届いたからである。私はその合格通知書を診療所で一人宿直している滋司の所にもって行き感謝感激の涙を滂沱として流し、それから二人で濁酒を呑んで乾杯し、さらにそれから、ふらつく足でおシンコさんの家に行き合格を報告し家中の人に祝福されたのである。

これに対して我が家の反応はいま一つであった。「どうせ精坊はやりたいたいことをやるのだから仕方がない」、程度の反応であったが母だけは喜んで呉れ、濁酒を都合して呉れたのも母であった。また、母は自分が一の関の出身なので一の関の駅前の知人の家の二階に夜だけ宿泊できるように手配をして呉れた。

三 関城時代

準備万端整い四月の新学期から関城中学校に登校することになった。入学金や月謝、それに陸中門崎駅から一の関駅までの通学定期代などは今迄の月給からおシンコさんに対する家賃など引いた残りを貯金して置き、それで全部賄うことができた。

滋司に対してお礼を出したかどうかは忘れたが、どうも余り大したことはしていなかったような気がする。恩人に対して失礼千万なことである。

さて、夕方五時頃の汽車で門崎駅を出て僅か十五キロ足らずの距離なのに三十分以上もかけて一の関駅に着き、それから徒歩で十分足らずで関城中学に辿り着くから家を出て駅までの徒歩時間を含めると一時間ちよとである。

当時の汽車は石炭不足のため亜炭というのを燃料としたため馬力が弱く急勾配になるとストップしてしまい、もう一度バックして力をつけてからその力を利用して再度坂登りに挑戦することが屢々であり、それでも登り兼ねると次に車掌が『全員降りて下さい』とアナンスする、すると全員降りて坂の下り口まで歩いて行き汽車が来るの

を待っているのである。そんな訳で当時の汽車は定刻通りに走ることは至難の業だったのである。

ところで、この学校の創立者は吉川顕雄先生と云い、また、その協力者は林頼作先生である。吉川校長はこの学校のすぐ脇の館跡の端にある願成寺の住職でもあり、温情溢れる教育者でもあった。また、学校から五分ほどの所に林産婦人科病院があり、その院長の林頼作先生は貧乏のため苦学して東北大学医学部を卒業された方であり、吉川校長とは無二の親友であった。二人は生活が貧しいため学問がしたくとも出来ないでいる子供達のためにと共々に私財を投げうち、昭和十三年にこの学校を設立したということ、勤労少年のための学校ということを表わすため校章は蜂をかたどり、その真中に中学の中を入れたものだったので旧制二高の校章によく似ていた。

昭和二十一年の四月某日の入学式の日、その吉川校長先生が式辞を述べられ朗々たる声で私達を激励されたことを覚えてゐる。次にクラスの各教室が発表され、それが終ると上級生による歓迎式があるので呼出しがあったら二列に整列して順に講堂に入るようにと上級生から伝達があった。

私は二年に編入したので二年生と一緒に先に講堂に入っていればよかったのに、編入生として教室で紹介されたので、歓迎式にも一年と一緒にの方がよいのではと考えたのが誤りのものであった。一年生の後から講堂に入って行くと講堂の入口から左右に三年生が二列に立ち並び、入ってきた一年生を両端から順に殴るのである。

三年生は六十名余であり、それが三十人ずつに分かれて列を作っているので都合三十発ビンタを食うことになる。尤も、本気でなく体裁で殴る上級生が多かったので軍隊ほど応えなかったが、中には本気で殴る馬鹿もいるので一年生の中にはひっくり返る者もいた。私は流石に軍隊で鍛えているのでこの程度のビンタで驚くようなことはなかったが、これが滋司の云うバンガラというものかと感心した。

ところで私と一緒に受験したもう一人は遂に姿を現わさなかった。結局この年の編入者は私一人だけだった。

翌日から正規の授業が開始された、先ず最初の時間は西洋史であり、高橋殿という一の関中学の先生が講師として来ており、その先生の授業である。

先生は先ず黒板にEGYPTと云う字を英語で書いたのには驚いたし感銘もした。これこそ中学の授業であると食い入るように古代エジプトの話聞いたのであり、以後私は西洋史が大好きになった。

こんな調子で私の夜間中学の生徒としての生活が開始された訳であるが、何分にも絶対勉強をやるぞという決意での編入なので編入生という中途はんばな立場ではあったが大体のことは理解できた。特に英語は二年生の誰よりも私の方がよく出来た。と云うのは正規の二年生は一年生の時が終戦の年なので、終戦迄は誰も英語を知らず、それ以後から英語の授業が開始されたので半年足らずの期間、それも戦後のどさくさの中での英語なので、昔の女学校の教科書を完全にマスターした私の方が出来たのは当然のことである。

私は木材会社を三月一杯で退社し、家で農作業を手伝いながら学校に通うことにし

た。しかし、どんなに手伝いしたからといって一銭も家では出さないので月謝や定期代や夜だけの下宿代などは自分で工面しなければならず、この費用を稼ぎ出すため、日雇いの労働をしなければならぬ。

この頃は丁度田植の準備期間であり、田起しの最中なので家の馬を用いて馬耕の日雇をするにしようとした。親父は家の馬耕が済めばやってもよいというので手初めに自分の家の分をやり、それから毎日よその田んぼの馬耕打ちに精を出した。

そのうち、私の分家で左官兼土木請負をしている円太夫叔父の家の離れ屋を借りている円太夫叔父の親戚の人の田起しも引き受けて朝から田んぼで馬耕打ちをしていたら、三時のおやつをその家の娘が持ってきた。彼女は一の関高等女学校の三年生であり、我が門崎村一番の美人として評判の高い才識兼備のお女中であり、私も円太夫叔父の家に行った折にはちらりと見掛けることもあったが、声など掛けることなど出来ない高根の花であった。

その才識兼備のお女中がなんと私のためにおやつを持って来て来たのである。私は初めて天下の美少女を間近に見た途端に、その美麗なる容姿に息を呑んでしまった。遠くから見ても美人であったが側で見ると天女のような美しさである。世の中にはかくも絶世の美人もいるものかなと感嘆し、しかも、その美人が私如き者のためにおやつを持ってきて呉れたことに感激してしまった。

尤も、そんなことは当然であり、田起しの日雇仕事をしているような者に大の大人がおやつを運ぶ筈はなく、こんなことは女子供の仕事であり、その子供が運んだだけのことであるが、その時の私にとっては感激また感激の一刻であった。

それからというもの、私は農閑期には円太夫叔父の所に行って左官の手伝いや、土方仕事をしようになった。すると、たまには天女のような女学生に会うこともあり、その内に次第に話などもする機会も出てきたのである。私も夜間とはいいながら中学生のはしくれであり学園関係の話にはこと欠かないので次第に親密な関係になってきた。円太夫叔父の家の前はすぐ砂鉄川が流れており、円太夫叔父の川舟がいつも繋いであったので、その舟に二人で乗り砂鉄川を静かに上り下りしたこともあった。

手紙なども交換したことがあり、或る時彼女から英語で、「I am resp ect you」という手紙が来たときは嬉しさのため気絶するほどであった。am が余分であるという文法上のミスなどこの際全く問題ではなかった。

しかし、私は初恋の甘酒にだけ酔いしれていた訳ではなかった。兎に角勉強が面白くて学校は一日も欠かさず出席した。そのお蔭で成績は抜群であり各学期末の通信簿は優のみが連記してあった。これには私も驚いてしまった。何分にも小学校時代に甲を取ったのは一年生の時に一つか二つだけであり、それ以後の七年間は乙と丙それにとまに丁を取るといふ低脳児が今や優のみを取るといふ奇跡に我ながら驚嘆したのである。しかも、私は博愛精神も強かったので試験の際はできるだけ多くの級友にも良い点数を取らせようと誰彼かまわず解答を教えた。その方法は最初に答案用紙を二枚取り、その一枚に解答の要旨を書いてそれを順に必要とする者に廻すのであり、必要ない者も必要とする者に順に送る手伝いをしたものである。

夜間中学なので会社や国鉄などに入っていて予習、復習などしないのは当然として試験の当日になって今日の試験科目を知るなどと言う者も多く、そのことを先生方も知っているのでカンニングに対しても、出席についても大方の先生は寛容であり、今の管理社会的学校教育とはおよそ無縁の学校教育だったのである。

それにもかかわらず、関城中学と学制改革後の関城高等学校の卒業生名簿を見ると会社社長とか管理職、官公庁の役人、小中学校の先生、自営業など壮々たる人物が多く輩出しており、現代の詰込み式管理教育とは一味も二味も違った自主独立的人材養成にこの学校は成功したと言えるのである。

何もカンニングが良いというのではないが、そんなことに目くじらを立てなくとも人材は育つということである。

さて、私は勉強が出来るようになると同時にバンガラの方もまた人一倍激しくなり、旧制高等学校の弊衣破帽を模倣して破れ帽子に油を塗り、破れマントをホチキスでそっちこっち抑え、下駄は直径四センチ位の太い白布で鼻尾を自分で作り、鞆は膝の下あたりまで長くぶら下げ、余り多くない髭を伸び放題に伸ばし、異臭プンプンたるいでたちで毎日通学した。尤も、当時の中学生は戦争時代の服装統制に対する反感から一様にバンガラ・スタイルに復活しており、私だけが特に目立つというほどではなかった。しかし、どうした訳か、馬耕の際に馬が私の帽子を噛み千切ったため、三分の二ほど帽子が破れ、底しとそれに続く前頭部の僅かな部分が残るだけとなったので、後ろの方は紐で結び、やっとのことで被っていたが遂にその帽子も被る事が出来ないほど破損したので、やむなくそれを捨て山高帽子のつばを下にさげ、真ん中に勤労青年を象徴する蜂のマークの校章をつけてかぶることにした。ついでに、太い鼻尾の高下駄は格好こそバンガラ風でよいが歩行には支障が多く、転ぶことが多かったので、この際廃止してしまい、片っ方は低い下駄に、もう片っ方は藁草履を履くことにし、時々はき替えて足がちんばになるのを矯正した。それに例のホチキスでそっちこっちをとめたマントを着用し、鞆を引ずるようにして歩行するから、これは壮観である。忽ち我が村でも一の関市でも評判となり、夕方私が駅を下りて学校に歩き出すと子供達が『そら来た』と言いいながら私の後をつけて来るのである。

当時、一の関に私と並び立つ異様の風体をした中学生が二人おり、二人とも一の関中学の生徒であったが、その内の一人を青柳と言ひ、初夏から秋口にかけては禪一本にマントだけ着して登下校していた。もう一人は鈴木と言ひ、これはマントではなくオーバーを着るのであるが、そのオーバーは爺さんの爺さんでも着たのかと思うほどの年代物であり、足駄が隠れるほど長く、しかも至る所に見事な虫食いがあり、思わぬ見惚れるような代物であった。私を含めてこの三人が一の関の名物男であり、青柳と私とは同じ大船渡線の通学なので時折一緒になることもあり、二人で歩くと誰もが足を留めて見たものである。しかも、その青柳は時々マントを大きく振り上げるから禪一本の中身が丸見えとなり喝采を博するのである。惜しいことに青柳は貌美溪の岩山の上から飛び降りて自殺してしまった。きつと旧制一高生の藤村操が華蔽の滝から飛び降りて自殺したのと同一の心境になったのであろう。

或る時、一の関中学の生徒会の役員に会うため例の装束で出かけたら大町の中頃まで来たときに俄か雨が降り出した。藁草履というものは雨水が足の後ろに跳ね返り、ズボンの裾を濡らすものである。そこで私はその藁草履と下駄とを脱ぎ、丁寧に揃えて一の関の目抜き通りの真ん中に置き、素足で関中に行き、用事を終え帰ってきたのであるが、なんと、元の所にちゃんとその草履と下駄とが揃ってあるではないか。幸い雨も上っていたので何食わぬ顔でそのちんばな履き物を履いて帰ったのであるが、これを見ていた人があったらしく大変な評判になったことがある。それにしても終戦直後とはいいいながらバスもトラックも何台かは走っており、よくもその儘で繁華街の真ん中に履きものが残っていたものだと感じしてしまった。

さて、このようにして異様な風体の秀才は関城中学二年生をトップで修了し、最高学年の三年になったのであるが、三年制となったのは戦時中の特別措置であり、昭和二十二年度から再度四年制に復活することになったので、先輩達はその儘四年生として残り、結局私達は三年生にはなったが先輩としての立場に変わりはなかった。しかし、我々三年生はあの悪名高い新入生歓迎方式は新時代にとってふさわしくないと強硬に主張し、昭和二十二年度からの新入生からは真の意味において温たかく歓迎することにしてしまった。その最も強硬な主張者はかく言う弊衣破帽の秀才高橋精一であり、彼は今や関城の名物男であり先輩と謂えども一目も二目も置いていたので彼の主張で通らないということは殆んどなかった。何分にも此の秀才は同級生よりも年が四分であり、同時に母校に復帰した連中のこと。)と同様に恐れられていたので今や貫録充来の「精坊」から「精さん」にと格上げになっていた。

この年から我が関城中学は他方面に活躍することになった。従来から野球や卓球などの同好会組織はあったが、これらを正式の部として他校とも交流し、また、各種の試合や行事にも参加することとした。

この中で特に上達が顕著であったのが野球部と陸上部とであり、私は陸上部に所属し、トラック競技では八百メートルを走った。また、フィールドでは棒高飛びをやり三メートル二十位まで飛ぶことができた。

昭和二十二年の六月頃に岩手県南・宮城県北の中等学校合同陸上競技大会が宮城県の若柳町で開催され、我が関城の三年生の千葉力は五千メートルと一万メートルに優勝し、私も八百メートルで一等となった。これは関城中学始めての快挙であり、私共は大いに面目をほどこした。

野球部もめきめきと力を発揮し一の関農工学校や千厩農学校を負かし、県南の雄、一の関中と試合をするまでに成長した。尤も、関中にはどうしても勝てなかった。

この時、私は関城中学生徒会会長に選ばれ、全軍を指揮する立場にあった。或る時、練習中に棒高飛用の竹の竿が折れたからたまらない、三メートルの高さから真逆さまに落ちてしまい、したたか腰を打ち暫く練習から遠ざかっていた。しかし、出しゃばり男の私は何かをしたくてしょうがないので、幸い応援団長が欠員だっ

たので今度は応援団長をかって出た。

上級生で元応援団員をした人から毎日々々応援方法の特訓を受け、全軍を激励叱咤するこつを習ったのであるが、この応援団長ほど私にびつたり役廻りをしたことは後にも先にもない。何分にも私の声は四キロ四方に響き渡るほどの蛮声であり、お袋がおんぶして歩くのを恐れたほどの美男子であり、加えて一の関の三羽鳥といわれたほどの弊衣破帽のパンガラ振りであるから非の打ちどころのない名応援団長というべきである。この名応援団長の出現で我が関城の応援は日の出の勢となり、試合の度に手のすいている連中を掻き集め、俄か応援団を結成しては試合の応援を声が続く限り展開するのである。何分にも応援団長の装束が異様であり、馬鹿でかい声を出すので我が関城中学の応援団は有名になり、或るとき盛岡の陸上競技の試合の応援に出かけた時、どういう行き違いだったのか盛岡農学校の応援団に対して関城の応援団が攻撃をしかけるという情報盛岡農学校の応援団に流れ、彼らは我々を盛岡の駅に迎へ打つ計画を立て、駅ホームの端に陣取って今か今かと待ち構えていた。

そんなこととは露知らず関城の応援旗を押し立て、構内に降りたところへ、これをまじえるといふのである。何がだか判らないが異常な雰囲気を感じた我々は、その前に話し合いたと申し入れ、私と数名の団員とで彼等のいるところに行くことにした。例の山高帽にマントを着て、この日は鞆をさげていないので、そのマントを縄で縛り、下駄と草履とをちんばに履いた私のいでたちに彼等は驚愕し、一瞬たじろいでしまった。その隙を狙い、すかさず、『団長は誰だ。』と私が叫びだした。すると一人の男が出て来たので、私はそっちの方にのっそのっそと歩み寄り握手を求めた。敵は一瞬驚いたようであるが、敵も団長をやるぐらいの者であるから、態勢を立て直して私の握手に応じた。そこで私は『これは一体どうしたことですか、我々にはさっぱり訳が判らない。事情をお聞きしたい。』と言うと彼はやや意外そうな顔をしたが、『いや、そっちの方が攻めて来るというので先手を打ったまでだ。』と言う。そこで私はおだやかに我々は一の関の壊れヤカン（夜間中学の蔑称）と言われているがいまだかつて理由の無い喧嘩をしたことはない。盛岡農学校といえは伝統ある学校であり我々はむしろ尊敬さえしている。我々が喧嘩をしかけるなどということはありません。何かの間違いである。と言うと向こうも、『どうも可怪しいと思っていた。』と言う。それでは此処で和解しようということになり、双方の応援団員一同で盛岡農学校と関城中学校応援団万歳を三唱して、それから両軍一団となって会場まで堂々の行進したのである。

このように、我が関城中学の応援団は大活躍するのであるが、応援というものは部活動が活発になれば、それに応じて応援も昂まるのであり、その逆では絶対はない。特に関城のような夜間中学ではそれぞれが仕事を持っているので、昼間集まることは困難であり、余程の大会でもない集合させるのに骨が折れるのである。

ところで私は二年生の時の十一月に駅前の理髪店の二階から追い出されていた。この理髪店の二階に泊っていたのは当時三年生であった先輩二人と私の無二の親友

の良吉さんの四人であった。先輩二人は一の関にほど近い所からの通学であったが、私と良吉さんとは同村であり、良吉さんは門崎駅前 of 精米所の息子であり、いつも同じ汽車で通学していた。尤も、門崎駅からは五・六人が乗っていたが良吉さんと私は何時も同じ行動をとっていた。

さて、十一月の或る夜、四人で磐井川の対岸にあるリング畑に夜襲を掛けることにした。夜も一時を過ぎた頃、例によって理髪店の家の前にある電信柱を伝わって二階から窓越しに脱出し、磐井川の鉄橋を渡り目指すリング畑に入り、首尾良く真赤なりンゴを袋に入れ意気揚々と帰還することになり、鉄橋の真中辺まで来たとき向こうの方から汽車がやってきた。すは大変と必死に走り対岸に辿りついたすぐ後から汽車が轟音を響かせて通過したのには肝を冷やした。

そんな訳で夜中の二時を過ぎた頃、またもや電柱をよじ登り部屋に入ってみると、意外や意外、部屋の真ん中に理髪屋の親父さんがでんと坐り、我々を睨んでいるではないか。四人がさすがと入った所で、その親父さんが我々に『今すぐ出ていってくれ。家は床屋であり清潔をモットーとしている。それなのに家の前の電信柱に小便はするは、そこから、出入りはするはで迷惑この上ない。しかも、今は何時だと思っっている、今迄我慢に我慢を重ねて来たが、もう我慢できない。とっとと出て行け。』と凄さまじい権幕でがなり立てた。

こうなっては居られたものではない。忽々に煎餅蒲団を紐で縛り悄然として住みなれた床屋を後にして一の関の街に出たものの行き先がない。困り果て、いた時素晴しいアイデアが閃いた。そうだ、学校の講堂に行こうということ、皆を引き連れて講堂に行き、舞台裏にある荒れ果てた倉庫の中に入って一夜を明かした。

翌日、先輩二人はさっさと家に引き上げてしまった。困ったのは我々二人である、仕方がないので、その儘ずるとそこに泊り通学していたが、やがて先生にばれてしまった。その先生の名前は忘れてしまったが、拓殖大学出身の若い方で野球部の顧問をされているきつぷのよい先生で、宿を追い出された訳を隠さず話たら大いに同情して下さって、『俺が何とかしてやる、明日まで待て。』と言うのである。翌日、先生の所に行くと、『待っている』と言う、やがて、先生は一年先輩で野球部の生徒を連れてきた。そして、『これと話してみろ』とのことであった。彼は一年生で小岩君と言い一の関の沢部落の消防団長の御息とのことである。彼の言うには一の関が市に昇格する前は沢部落にも手押し消防車があり、それを入れて置くポンプ小屋があった。今は市の消防署ができたので、そのポンプ小屋は空家になっている。親父はそのポンプ小屋を貸してもよいと言っている、というのである。しかも、ただで貸すというのだから社会救済事業の典型例というべきである。

早速二つ返事でお借りすることにし、翌日お伺いすることを約束し、先生に厚くお礼をして意気揚々、天にも登る気持で帰りの汽車の中でその話をしたら、俺も私も入りたいという入居希望者が殺到した。特に一級先輩の三浦という人、一級後輩の菅生という子、の二人が是非とも入居したいというので、それでは明日四人で見に行こうということになった。翌年四月に二年下の鈴木というのも同居することになる。

翌日、小岩さんのお宅に伺い、お許しを得たので小岩君の案内でそのポンプ小屋を見たのであるが、間口三間、奥行四間ほどの小屋であり、前の方はコンクリートでならした土間となっており、奥の方と入って右側に一間ほどの床板が張ってある。入り口は消防車を出し入れするため開き戸になっており、そっちこっちに隙間があり寒そうではあるが我々には申し分のない高級住宅であり、電気も電球さえ付ければつくようになっていたもので、早速、ポンプ小屋の後の家に挨拶に行き、今後お世話になるので宜敷しく、それに便所をお借りすることになるので、それも宜敷しくとお願した。それから学校に行き、早速このことを先生に報告したのち煎餅蒲団を担いで沢部落の新居めざして帰ったのであるが、その途中駅前横丁の闇市により生活に必要な最低限度の品々、例えば、掃除道具、茶碗、箸、バケツ、それに電球と濁酒（当時、清酒などどこでも売っていなかった。）を購入した。

この時点で我々は当分この新居に住む考えであり、帰り道さしあたり明日もってくるべきものの分担を話し合ったのである。

早速掃除に取り掛ったが何も無い空家なので、掃除はいたって簡単であり間もなく濁酒で乾杯ということになり、暗くなってから家路に着いたが前途に対する期待と濁酒の効きめとで汽車の中は大騒ぎであった。

翌日、各自が鍋、薬缶、茶碗、それに新入者は蒲団や毛布、それに米を持ってやってきた。それらをポンプ小屋に置いて学校に行き、授業が終ってから御飯を炊いて食べることにしていた。

帰ってから気がついたのは竈がないので飯が炊けないということである。こういうピンチになると私の頭は俄然として悪知恵を発揮する。この沢部落は大船渡線添いに伸びた部落でその尖端は山に突き当り、そこに昔、亜炭を掘っていた工場跡があり、その中に煉瓦作りの煙突が立っていた。その煙突の煉瓦を剥がしてきて竈を作ろうというのである。「善は急げ」早速行動を開始した。工場跡に到着したので私は全員に命令した。煙突の中に入って煉瓦を中から剥がせ。そうでないとすぐ気づかれてしまった。この作戦は大成功であった。中は比較的崩れやすく簡単に煉瓦を剥がすことができた。作業中だけ懐中電灯を灯した。当時電池は貴重品であり仲々手に入らないし、第一、泥棒稼業が発覚する恐れがあったからである。ついでに工場の古板も剥がして燃料にすることにした。

突貫作業の結果、立派な竈が完成した。ポンプ小屋のすぐ前を先程の工場跡の方から小川が流れてきていたので、その川の水で米を研ぎ夕飯を炊いて食べたのは真夜中のことであった。

こうして食糧のある内はポンプ小屋で暮し、なくなると家に帰りまた食糧を調達するのである。

しかし、労働をしないから軍資金が不足する。そこで一計を案出した。私の家では当時、相当規模で葉煙草を栽培していた。葉煙草は専売局の管轄下にあり、栽培反別、栽培本数など厳重なチェックがあり、専売局では葉煙草の密売防止に務めていたが、当時は煙草不足のため煙草栽培農家では何処でも煙草の葉を刻んで呑んでいた。

我が家の親父も大の煙草好きでこの密造煙草を呑んでいたもので、私も親父に倣いもっぱら密造煙草を吸っていた。そこで、この煙草の葉を盗み出して紙巻煙草を生産し販売することにした。当時は何処の町にも闇市があり、そこでは密造煙草もその煙草を作るための簡単な道具も、巻紙も売っていたので、その煙草製造機を購入して私設専売局を開始した。最初はこの機械の操作方法がどこもなく生産性が低く、そのうち出来上りも悪く売り物にならず、自分等の自家消費用にしかならなかったが、そのうち技倆が向上し闇屋が喜ぶような製品を納入できるようになった。一本一円であり五十本を紙で束ね一束五十円で飛ぶように売れた。

その内もう一人の下級生も自宅から葉煙草を持ってきて巻きだした。ポンプ小屋は私設専売局に早変わりしたのである。昼間は全員で煙草製造労働に従事し、夕方になると学校に出かけるのである。一日本気になって巻くと一人で三千本は巻けるのである。後になって知ったのであるがアメリカにおいても初期にはこの道具を用いて生産したが十時間労働で一人三千本がノルマであったという。

三千本では三千円の収入である。これは当時としては大金であり使い切れるものではない。二年後に中学校の代用教員になるのであるが、その時の月給が二千三百円であったから、如何に大金であったか判る筈である。

我々はたちまちにして成り金にのし上ったのである。尤も、煙草の葉が手に入る間だけであり、その期間が過ぎるとピイピイと音を上げるのである。

そのうちに、さらに二人が入居してきた。彼等は一の関中学の生徒で私の小学校時代の後輩達であり、一人は駅の保線区長の息子でもう一人は村長の孫で、昔、私が小学校二年の時いじめられた橋本先生の子供である。彼等がどういふ訳でこの山賊集団に加入したかその訳は忘れたが、兎に角七人世帯になってしまった。

この集団は原始共産制社会であり、農家の子供は米や野菜、精米所の子供は当時貴重品であった砂糖や粉を家から盗んで持ってくる。サラリーマンの子供は飯炊きや煙草巻きに精を出す。また、日曜日には土方に出て金を取る。となっていたので、それがこの家の全財産であった。そして、食うものも呑むものも無くなれば暫く家に帰り、百姓仕事を手伝い親の機嫌を良くして次に備えるのである。

或る時、おしるこを作って食べようということになり、私達農家出は小豆を、良吉さんは砂糖を持寄り大鍋に一杯のおしるこを作った。この大鍋は昭和二十三年の九月一の関を襲ったアイオン台風は沢部落近くまで押寄せたので一応被害に遭ったものとして配給されたのであり非常に便利な鍋で殆んどの料理はこの鍋を用いた。

さて、六十年近く生きてきたがこの時ほどおしるこを食べたことはない。大きな井で四杯食べたらずき気がしてきたので私はやめたが大後輩の鈴木は六杯も食べ、さらに夜中に目を醒ますと又も食べていた。翌日が大変である。七人が便所の前に列を作り『早く』、『早く』と順番を待ったのである。

さて話は戻るが昭和二十三年の四月に我々は四年生になるべきところ、学制改革で新制高校になってしまい、今年もまた新制高校三年生と丁寧にも三年生を二度やるこ

とになった。

この頃になると、もう少し勉強をして大学に進んでみたいという気持が強くなり、去年のように生徒会活動に熱中する気がなくなっていた。したがって、生徒会長も応援団長もやめてもっぱらポンプ小屋にこもって勉強をするようになった。

尤も、葉煙草が取れる季節になると私設専売局を再開しフル生産したのであるが、昼は煙草巻き、夜は学校に行き勉強をする筈であったが段々と学校に行く回数が減少してきた。というのは金のあるのにまかせ映画を見に行つたのが癖になり、ポンプ小屋を出て学校に行く道と映画館に行く道との交差点にくると皆で下駄を投げて裏が出れば学校、表が出れば映画館と賭をするのである。そのうち皆技術が上達し、いつも表ばかり出るようになってしまった。そんな訳で学校より映画館に行く回数が多くなり、特に封切り映画の場合は必ず見に行つたのである。

しかし、この時代ほど勉強した時代もなかったと思うのである。学校または映画館から帰ると勉強を始め、一時、二時は当然として明け方まで勉強することの方が多かった。

我々がポンプ小屋で山賊同様な暮しをしていても部落の方々は何一つ文句を言わなかったのは、時々煙草を献上したことよりも我々が一生懸命に勉強をしている姿を見ていたからだと思われる。どこにでも物好きなおばさんはいるものでポンプ小屋の付近に住むおばさんが時々お話にやって来る。そして、このおばさんが我々の生活振りを部落の人々に話していたようである。

私は英語と西洋史とがことの外好きであり、この二科目を中心に勉強をした。先輩の三浦さんも私立大学への進学を希望し勉強していた。彼は隣村でも有数の金持ちの息子でお金の心配はないが我々は貧乏人であり、とても私大を狙うことはできなかった。特に私の場合は家から金が出ることは絶対にならないから、そんなことを心配する必要が全然ないが、そのかわり、自分で工面する工夫をしなければならぬのだが今迄もそうだったようにこれから何とかなるさ、といった例の楽観論が身についているので兎に角勉強が先とばかり毎晩二時・三時まで小野圭の英文法や著者名は忘れたが三百ページほどの西洋史の本が赤線や青線で字が読めなくなるまで何度も何度も読み返したものである。

眠気がでてくると全員でポンプ小屋の前に並んで一高寮歌、三高寮歌それに北大寮歌などを声高に歌い眠気を醒したし、それでも駄目な時は薬局に行きカフィンを買ってきておき、それを飲んで眠気を払うのであるが、或る時三浦さんがこのカフィンを飲み過ぎてしまい顔は蒼白となり、手足は痙攣するやらで大変なことになってしまった。手のひらで顔を叩いたり、体をゆすったりしたが仲々とまらない。皆で大騒ぎをしていいうちに正気になり安堵の胸を撫で下したことがある。

その三浦さんも翌年の四月に日大に見事合格した。

このポンプ小屋は当時の高校生の社交場でもあり、入れ替わり立ち替わり高校生が出入し、或る者は哲学を論じ、また或る者は恋愛論をぶつなど談論風発かしましきこと限りなき状態であり、そのホスト役は私である。何分にも私が一番論争好きであり

誰彼かまわず吹きまくるから我こそはと意気む奴は必らずポンプ小屋に参上するのである。関城高校生だけでなく一の関高校生（一高生と言った。）も多きていた。

後年、同窓会の折ポンプ小屋に私も行ったという人が多く、その人達は私のことを知っているが肝心の私の方では誰が誰だか殆んど覚えていないのである。それほどにポンプ小屋参りが多かったのである。私が覚えてるのは来る奴は大体ドロクをぶらさげて来るが多く、お蔭様で酒には恵まれたということである。酒だけでなくこれ等の友人から勉強の仕方や大学の状況とか入試の方法なども随分と教えられた。特に、一高生は流石に進学校の生徒だけあって大学入試に関する情報とその対策についての知識は我々壊れヤカンの生徒とは格段の相違であり、入試に関する資料なども随分と貰ったものである。

八月の或る日、勉強に疲れた私と良吉さんとで山登りを計画した。その山というのは種山ヶ原のことで、江刺市と遠野市と気仙郡、それに東磐井郡の境界に横たわる広大な高原であり、二市二郡の共同牧場なのでもある。

二人で米や缶詰、味噌に漬物それに飯盒と毛布一枚をリックサックに詰込んで大船渡線で摺沢駅まで行き、そこから歩きだしたのであるが先ず興田というところを過ぎ天狗岩という当りから満足な道がなくなり、そこで迷ってしまった。今でこそ立派な道になり車もたまには通るようになったが当時は家一軒、人一人いない山の中であり道の聞きようもない。

やむなくそこで一泊ということで飯盒で飯を炊き、持参の酒で夕食を摂り、いい気分で野営しようとしたら山蚊がブンブンと襲ってきて眠れたものでない。そこで私は一計を思い付き良吉さんと二人で付近から木の枝を切ってきて我々の寝床をすっきりと覆うことにした。これは大成功であり翌朝まで塾睡できたのである。

翌朝、また飯盒飯を食べ種山ヶ原目指して出発した。先ず天狗岩に登り下界を見回すと、種山高原のなだらかな裾野が幾重もの大きな巒をなし、その先は雲のように青白くなって次の巒へと続いている。宮沢賢治は「種山が原の山の上は海のようにうねる」と歌っているが本当のことだと思つた。山がなだらかにうねり大きな起伏となつて次第に高くなり、それがまた次第に低くなって次のなだらかな起伏へと続くのである。その大きなうねりが一つの巨大な山巒なのであり、それが幾重にも連なつて最高峰の物見山まで続くのである。そして、そのうねりの手前は濃い緑で覆われ次はやや明かるい緑に変わり、その次が青味がかつた緑に移り、そして一つの山巒が終り次の山巒に移行するあたりが薄青い雲のようになるのである。その一つの巒の広いこと歩いて一日かかるのではないかと思つたほどである。

さて、天狗山の下の方に一本の細く白い道筋が見える。あの道を北上すれば種山ヶ原だと確信した。早速、山を降りてその道に入り人っこ一人通らない山道を二人で種山ヶ原目指して北上するのであるが道は巒のうねりとともに高くなるが、前方にさらに高い山巒が見えだし、行けども行けども目の前の山巒は果てることがない。「次はきつと種山が見えるぞ」と意気込んで前進するのだが道が頂上に達すると次の山巒が立ちほだかるのである。二日目も夜営をし酒を飲み木の枝を蚊帳がわりにして眠り、

三日目となり今日こそは種山に到着する筈と出立したが実はもう山登りは飽きていた。行けども行けども高原が続き山草と萱と所どころに群生する木ばかりだからである。そろそろお昼の支度をしなくてはと思って水のある所を捜しながら進んで行く。むこうの方に牛が見えるではないか。我々が三日振りに見た動物は牛だったのである。やっと種山牧場に辿り着いたのである。次第に牛の数が増してきた。大きな大きな雄牛が我々の方にゆっくりと進んできた。これは危険だぞと思ひ反対方向に歩き出したら突然その牛が走って我々の方に突進して来るではないか。二人で一目散に逃げたが何せ背中に大きな荷物を背負っているから思うように走れない。必死で走っていたら突然かんらんかんらんと大声で笑う声があったので見ると牛の見張り人のようであった。彼は我々に『牛にからかわれましたな。』と笑いながら言うのである。見知らぬ人がくると時々やるそうである。件の牛はゆっくりと群のほうに戻っている。

もう山登りはこりごりである。大体、情緒性のないものが山登りなどしたところで疲れるだけで録なことはない。我々は姥石という所でお昼を食べ、ここからバスで水沢に行き東北線に乗替えて一の関につき、やっとの思いでポンプ小屋に辿り着いたのである。本当に御苦労さんなことでした。

この秋は煙草が大豊作でお蔭で我が私設専売局の方も大車輪の生産態勢に入ったが、どうした訳か販売の方がおもしろくない。以前のように闇屋が心良く買ってくれないのである。そこで我々は煙草の行商をすることにした。先輩が岩手県北の某中学校で助教諭をしていたが、その人が我が村なら買う人がいる筈だということで、そこまで行ったが思うようには売れなかった。今度は石巻市に行けば大量に売れるというので出かけたが、その闇市では一本五十銭なら買うというので結局五十銭に値切られてしまった。

そんなこんなで昭和二十三年は終り、ポンプ小屋の住人は貧困の中で新年を迎えたのである。何故私設専売局が破産の運命を辿らなくてはならなかったか。その理由はいたって簡単である。正式の専売局が増産態勢に入り、市場に潤沢に煙草が出廻るようになったからである。そうなるとうも高くて不味いポンプ小屋専売所の煙草を吸う筈がないから倒産は必須の成り行きだったのである。

この話を私のゼミの学生達に聞かせたら彼等が卒業する時、先生への贈り物として煙草巻器と巻紙、それに煙草の刻み葉の入ったセットを贈って呉れた。東武デパートで一式売っているとのことである。

これを手にして三十数年振りに手製紙巻煙草を製造してみたが昔のように上手に巻くのに随分と手間がかかった。十数本目でやっと昔と同様な煙草を巻くことができるようになった。それにしても本当に懐かしい思いがした。

今やポンプ小屋は空家同然である、私と良吉さんと菅生だけが時々泊るだけで訪ずれる人として無くなってしまった。訪問しても無人のことが多いから当然の成り行である。

そこで私は次の商売を考えた。それは中学校の助教諭になることである。この頃では代用教員という言葉はなくなり、助教諭と言うようになっていた。その助教諭の採

用試験が二月にあるというので市の教育委員会に行き受験資格など聞いたら、旧制中学校卒業と同程度であるという。そして私の場合にも該当するというのである。何故ならば、旧中卒とは小学校卒から五年間であり、私の場合は小学校高等科が二年、それに関城中学が三年、さらに関城高校に一年行っているのので、旧中卒以上となるから受験しても良いというのである。当時は中学校の先生が不足していたのである。

早速受験手続きを済まし受験態勢に入った。私は英語で受験することにしたのでそれからは英語ばかり勉強した。

二月の中頃と思うが英語担当の助教諭任用試験を受験した。その時の情景はどうしても思い出すことができない。何人位い受験し、問題はどうかだったか、何人位い合格したかなど全く記憶にない。

ただ、三月初めに合格通知が来たことだけは確かである。続いて西磐井郡弥栄村立

中学校に配属する旨の通知も届いた。これでやっと商売にありつけた、と思った。関城高校の三年三学期の試験も抜群であり、続いて良吉さんが二番であった。しかし、三年間も片時も離れずに暮してきた良吉さんともお別れであり、懐しいポンプ小屋ともお別れである。淋しいような気がした。尤も、もう一年、関城高校の四年生として通学するので、これが別れという訳ではないが、この時は何か無性に淋しく感じたものである。

事実、四年生になってからは殆んど学校に行かないので忘れ去られた存在となったのである。その良吉さんであるが四年生ではトップで卒業し、その後岩手県北の中学校に助教諭として二年ほど勤務したのち上京し、明治大学の夜間部に入り卒業後数年して税理士の資格を取り税理事務所を開設し今に至っている。

その良吉さんが三十年振りに会いたいと電話をしてきた。久し振りにお会いしたら娘が大東文化大学に入学するというのである。私は大喜びをして彼女を迎え入れた。そして、彼女が三年になった時私のゼミに入室したのである。娘の名は綾子といい大変な美人であるが、私はこの綾子を我が子のように可愛がり厳しく育てた。綾子は経営学科を卒業して父の手伝いをしながら勉強し、あと一科目試験に合格すれば父と同じ税理士の資格が取れるとのことである。誠に縁は異なものである。

さて、昭和二十四年四月、私は関城高校の四年生であると同時に弥栄中学校の助教諭でもある。

四月初め、その学校に学生服を着て出勤したのであるが、玄関で案内を乞うと十八か十九才ぐらいの青年が応対に出てきた。彼は私を転入生とも思ったのか教室の方に案内しようとした。校長先生の会いたいという大変な顔をしたが校長先生に会わせて呉れた。校長先生も私の姿を見てがっかりされたようである。何せ学歴は壊れヤカンといわれる関城高校の現役の生徒であり、学生服を着た風采のあがらぬ男が英語の先生というのだから不安にかられたのも当然である。それでも、職員に紹介して呉れ既に準備していた机に坐るよう指示された。

愈々、中学校教師の生活の開始である。昔、小学校の高等科の時代に教えて下さった佐々木先生がおられたのが救いであった。先生は何かと親切に教えて下さるのでま

ごつかずに済んだ。

私の担当科目は一年から三年までの英語を一人で受持つのは他に英語ができる先生がいけないというので当然として、体操もやってくれとのことである。成程、関城中学時代陸上の選手をしていたので走ることに跳ぶことはできるが、体操というものはやったことがないので辞退したが適任者がいないので、適当にやってくれとのことでもなく引き受けることにした。

生徒数は全校生徒百六十余名であり、三年と一年が二クラス、二年が一クラスだったと記憶している。そして、英語と体育の二教科で週十八時間を持たされた。

英語は　ジス　イズ　ア　ボーイから始まるもので私がおシンコさんの家で滋司から習ったのとほぼ同じなもので、これが一年であるが二年も三年も殆んど変りがない程度であり、当時の教育現場の混乱と語学教育の遅れがどんなものであったかを示すのである。私は自分が滋司から習った経験から文法を重視することとし、生徒の大半が判るまでは前に進まないことにした。体操は無闇矢鱈と走らせたことと野球を大いにやらせたように覚えている。

私の弥栄中学校教師がどういうものであったかは次に当時の生徒自身の言葉で語らせることにする。文中で私が関城高校を卒業していたと錯覚しているのは殆んど学校に行かず、試験の時だけ行ったから子供達は私が卒業したと思いついていたからであり、また、数学も教えたというのは間違いである。

この文は弥栄中学校創立三十周年記念に発行された時のもので、輝男さんは今私の郷里の川崎村役場で産業課長をしておられる。

ある恩師の思い出

三回生　小野寺輝男

最初に皆さんと共に弥栄中学校の創立三十周年を心からお祝いをしたと思います。そしてこの間に数多くの同窓生を立派な社会人として輩出して下さった諸先生方に対して感謝と敬意を表わすものでございます。

私達の中学入学が二十三年で戦後二年を経過したばかりであり、あの国運をかけた戦争による痛手がいえないうちに、さらにそれに追い打ちをかけるように二年続いて襲ったカザリン、アイオン台風による被害が著しく、地域住民にとってこれほど苦難の続いた年はなかったろうと思われます。

しかし、何時の時代でも同じように楽しい思い出や、苦しい思い出が生涯を通じて忘れ得ぬ思い出としてあるのですが、そんな中で特に私の心に残っている少年時代の唐突な思い出があります。それは中学三年になった春に新任としてこられた高橋精一先生のことです。

当時関城高校の夜間部を苦学の末卒業され教師として初めて弥栄にこられたのでした。学生服を着た若い先生は眼光らんらんとして、その容姿は一分の隙もなく、むしろ狂的にさえ見え怖いという印象でした。後でわかったのですが当時の先生は

寝食も忘れて学問に没頭していたんだということがうかがえました。英語と西洋史が得意な先生で数学も担任でしたが、日本史の授業が西洋史に移りおもしろく話してくれまですので時間が短かく感じたものでした。英語は又得意中の得意で英会話は勿論単語は八千語位自分のものにしていましたので、私達生徒の憧れの的にならない筈はありません。

そうこうして三年生の二学期頃から高校進学を希望する数人が放課後教室に残り受験勉強をするようになり、回を重ねるごとに夜まで延長するようになり、しまいには高橋先生が宿直を専用し自炊にまで発展し、その中に進学組が割り込む結果となり宿直室は荒れ放題で、このことが校長先生の耳に入り高橋先生は宿直室から追い出される羽目になってしまったのでした。しかし、どうしても志望校に入るにはもっと勉強しなければならぬので、先生を中心に思案の結果戦時中の経験もあるし、歴史の教訓を地で行くことに衆議一決、横穴を掘ってその中で勉強することにしたのでした。突貫工事で横穴式住居の完成を見、互によるこび合ったのですが、このことも校長先生の耳に入ってしまった一喝のもとに廃居となってしまいました。その後は高橋先生もさすがにこたえたらしく代案を出してくれませんでした。この時点では勉強の方法もすっかり板につき、それぞれの志望校に優秀な成績で入学できたことは熱血あふれる高橋先生と、いろいろアドバイスして下さった校長先生はじめ諸先生方のご指導のたまものと深く感謝いたす次第でございます。

問題の高橋先生には近年お会いすることができずにおりますが、数年前偶然に一の関の駅頭でお会いした時いただいた名刺に大東文化大学講師高橋精一の文字がくつきりと記されていました。

この横穴式住居事件では校長にしこたま油を絞られた。

穴掘作業に参加していた生徒の一人が愈々入居できるといっているので嬉しさの余り母親に秘密を洩らしてしまった。その父親が村会議員だったので、これは大変とばかり村長に報告した。村長は我が村の先生が横穴に住むということは村の名誉のためにも好ましいことではない、と判断し早速校長を呼んで注意した。

校長はかんかんになって怒り、私を校長室に呼び、『なんということをしてくれ。君は一体態度がよくない。職員会議になると紙飛行機を作ては飛ばし、それがこともあろうに私の頭に当るなど、先生としての態度がまるで出来ていない。今どき、原始人でもあるまいに生徒をそそのかし横穴を掘り、そこに住むなどということは言語同断である。』と烈火の如く怒った。これには私も参ってしまった。

そんな訳で当分家から通勤することになったが、私の村から弥栄村に来るには北上川に架かっている北上大橋を渡らなければならない。この橋は長さが百メートルぐらゐであるが、高さは三十メートル以上もあり、その上さらに十センチほど高いアーチがあり、それで支えている釣り橋であり、そのアーチは巾五十センチほどある。

このアーチの上を渡った者は齋職が数人だけであり、齋職が高所で作業するための肝だめしとして登らせられると、大体の者は三分の一程度まで登ると怖くな

って後戻りしてしまふそうである。そんな訳で此のアーチを渡り切った者は鼻高々であるという何を何かの折りに聞いていたので、『よし、何時か俺も必ずやるぞ。』と秘かに決心をしていた。「馬鹿の高登り。」とはこのことである。

さて、秋の頃だったと思うが学校で何か宴会があり、一杯機嫌で家に帰る途中に突然、今晚こそ橋のアーチ渡りを決行しようと思案した。一諸に來たのは同村の出身で私より一年先輩であり頭のよい人だったので師範学校に高等科から入り、卒業と同時に弥栄中学校の教諭として国語を教えておられる鈴木という人で、いまは私の生れた村の中学校の校長をしておられるが温厚な人であった。

それは晩秋の明月が輝やく明るい夜であり、だから今晚やろうと思ひ立ったのかも知れない。その北上大橋の橋の袂にきた時、私は鈴木先生にこれからアーチの上を渡るのを見て呉れと言った。鈴木先生は呆れ果てたような顔をしたが、次の瞬間、真剣になってその暴挙をとめにかかった。若しも失敗すればそれは同時に死を意味しているからである。この橋は東西に架かっているの、アーチは北側と南側の二つであり、私は南側のアーチを渡ることにした。

鈴木先生の必死の中止勧告を無視して私は裸足になり、一メートル二・三十センチほどの高さにあるアーチの端の上に登った。巾は五十センチほどもあるので、均衡を保持するにはそれほど気を配る必要はない。勾配は見た目ほど緩やかではなく立つのは困難であり、匍匐して進むほうが安全であることに気がついた。月明かりで大体のものは見えたが川面では薄暗くて見えなかった。そして、そのことが私の命を救ったのである。若し、水面が見えたとすれば気絶してその儘転落したであろうことは確かである。

下では鈴木先生がしきりに声を掛けて呉れた。これもまた私を励ましてくれた大きな要因である。『大丈夫か。』と言う問いかけに、『大丈夫だ。』と答えながら登って行き、三・四十メートルも登った時、つまり、今迄に登った者のうち引き返した者の引返し点まで來た時のことである。ふと下を見てその余りにも高く聳え立っているのに気が付き、突然猛烈な恐怖が全身を百万ボルトの電流のように流れた。次の瞬間に走馬燈のように、しかも物凄く高速で母の顔、父の顔、兄弟の顔、死んだ兄弟の顔、先生方の顔、学校、ポンプ小屋その他諸々が目の前を上下左右に映りながら去ってゆくのである。そして、次の瞬間『これは駄目だな。』と思った。

今迄にも怖いと思ったことは何度かあるがこれほどの恐怖に襲われたことは後にも先にもない。そんな時、下から鈴木先生が『大丈夫か。』と声を掛けて來た。地獄で仏とはこのことである。全身の力を出して『大丈夫だ』と答えた。これは自分に対しての呼び掛けでもあった。これを契機として再び渾身の力を振り絞って挑戦することにした。若しも下界が丸見えに見えていたら多分力尽きて転落していたことであろう。今度はよそを見ず真っ直ぐだけ見て登ることにした。どれぐらい時がたったのであろうか、今度は頭が下向きになってきた。やっと半分を過ぎたなどと悟った。そこで、今度は体の向きを替えなければならぬ。水面から大凡そ五十メートルも高い所の、しかも巾五十センチほどの狭い鉄面上で方向転換をやるのは曲芸以上の芸当であ

り、若しも昼間であれば下から見ている者は肝を冷やしたことであろう。月明りの中で鈴木先生が上でもささしている私を気が気でなく見守っているだけである。

私は慎重に慎重を重ねてやつのことで方向を変え、反対側に降下し始めた。これは思っていたより簡単であり、時間も登る時の半分以下で済んだように思われた。

やがて、足が平らな所に掛った。漸くアームの反対側に辿り着いたことを意味していた。それから慎重に足場を決め、そこから一気に橋の上に飛び下りた。そこには鈴木先生が私の下駄を持って立っていた。『やった。』、『やった。』私は鈴木先生と手を取り合って歓喜した。こんな嬉しことはなかった。兎に角一命を取りとめたのである。この時点では酒の酔などかけらもなく妙に頭が冴えきっていた。

これ以後、私は夢の中で高い高い梯子とか鉄塔が倒れ、それと一諸に転落する夢をよく見るようになった。兎に角、馬鹿の高登りはこりごりである。

殆んど関城高校には行かなかったが、たまに良吉さんと会って、勉強の進み具合とか試験の日程、出題範囲などは聞いていた。そして、試験になると出かけて行くのであるが級友達が珍らしがって寄ってきては何かと話しかけて呉れ、また、試験問題など教えてくれ有難いことであった。いまや昔と違い教わる立場である。したがって、試験の成績も昔のような訳にはゆかず、優を取る回数も減ってしまった。特に数学が駄目になってしまい、体育は何時也不可であった。出席しないから当然であるが、中学校では体育の先生が不可を取るといふ不可思議なことになってしまった。

子供達が高校進学で勉強を始めた頃、私も大学受験を決意した。しかもその大学とは北海道大学の文学部である。ここで西洋史を徹底的に勉強しようと考えた。何故、北大なのかと言うと、北大の恵迪寮に入りたかったからである。当時、北大恵迪寮に勝るほどのバンガラ寮は日本の何処にもなかったからである。

この時点で私は英語と世界史と国語には自信があり、物理はやや難点はあるがどうにかなる、問題は数学であった。そこで、数学の勉強を再度始めたがさっぱり判らない。そのうち、英語と国語と世界史とで点を稼ぎまくれば何とかなる、と思うようになった。

試験が近づくに従って次の難問が生じた。校長は若し合格すれば大学に行き、逆に残れば残るでは学校の方の人事に支障が生ずる。ここで退職するなり、何処かに転勤願を出して貰わないと困る、というのである。もっともなことである。さりとて北大に合格出来る保障はどこにもない。むしろ数学が足を引っぱり落ちる可能性の方が大である。私は勝負は七勝三敗の確率と踏んでいた。そこで、用心をして転勤願を出すことにした。次の学校でも勉強できるようにと考え、『岩手県の山奥の学校に行きたい。但し、電気のない所では困るので電気がある所ならば何処でも行きます。』と校長にお願いした。当時、県北の方では電気のない所が多くあったのである。

さて、三月初め頃だったと思うが北大受験のため札幌へと出発した。初めて見る北海道は雄大であり、どこか日本離れをした雰囲気があった。また、札幌の街の道路の巾の広さにびっくりしてしまった。

予約していた宿を捜し出し、荷物を預けると早速北大を見に行くことにした。農学

部の異様な建築物に驚き、また、クラークの銅像前では必ず合格するぞと誓ったものである。

試験の内容などはすっかり忘れてたが、予想通り英語、世界史が殆んど正解に近く、国語はまずまずであり、理科は良くて半分ぐらい、数学は零点に近いという予想となった。それでも平均点で六十点から七十点の間であり、若しかして合格できるのではないか、という自己採点であった。

全部試験が終り札幌の駅に帰る途中に道路端に大道易を開いている易者が大勢の見物人を前に講釈をしていたが、ぶざまな学生服を着た私を見て手招きをした。何用かと近づいて行くと、やにわに私の手を取り手相を見るや、『皆さんこの手を見て下さい、これこそ貧乏相の代表みたいな手相です。手線が単調過ぎます。若いのにこれくらいが大変です。』などと如何にも知ったか振って皆に説明するではないか。すると皆も笑いながら私の手相を覗きこむのである。

いや、私は腹が立ってしかたがなかったが多勢に無勢である、皆の笑いを背中に受けてすぐすと退散したが面白くないことこの上ない話である。一体、私の手相はどの易者が見ても肉付きは良いし、運命線は手首から中指まで真っ直ぐに伸び、大関秀吉の手相よりも運命線が伸びていると賞められたほどであり、知能線は親指と人差指の真っ中からこれまた真っ直ぐに小指の下方に伸び切っており、知能抜群であることを証明している。

それを何んだ、線が単調だ、貧乏の相が出ている、若いのにこれからが大変だ、なにをいい加減なことを抜かすか、とかんかんに怒って帰ったことを記憶している。

しかし、このへぼ易者の予言は的中した。私は見事に北大に不合格となったのである。しかも悪いことは続くもので関域高校から呼出しがきた。行ってみると、成績は兎に角として、出席日数が不足などというものではなく、試験は受けているのでその日は来ているだろうが、それは出席日数外なので一日も来ていないことになる。これでは卒業させることが出来ない、というのである。成程、一日も出席しない者を卒業させるといふことは今私の勤務している学校でも出来ない相談であり尤なことである。だがしかし、そこを何とかして下さいと三拜、九拜して帰ってきた。

やがて、数日して学校から連絡があった。卒業式に出席しなさい。それから当日は答辞を読むことになったからそれを用意しなさい。というものである。

私は天にも昇るような喜びであった。「捨てる神あれば拾う神あり」とはこのことである。早速答辞の準備をした。後で聞いたことであるが関域の先生方は随分と協議されたといふことで、彼は三年までは成績が良かったし、出席も良かった、さらに、生徒会活動にも尽力してきたし、応援団長もやった。慥かに四年になり中学校の先生をやるようになってからは出席が悪いのでこの儘では落第となるが、それでは可愛相なので卒業させよう、しかも、答辞を読ませれば決してお義理で卒業させたといふことにならないので世間態もよい、という温情溢れる先生方の一致した決定であったといふ。有難いことだと今でも感謝している。

卒業式の当日、総代となったのは成績一番の良吉さんであり、答辞を読んだのはど

ん尻の高橋精一であった。卒業式が終ってから校長先生のお宅で謝恩会をしたのを覚えてる。本当に関城時代は私にとって黄金時代であり、良い先生方と級友とに囲まれた想い出多き青春時代であった。そして、私がこうして大学の先生になれたのもこの関城夜間中学に入ったからのことである。こうして私は夢多かつた関城高校の門を去ったのである。

さて、目出度く高校を卒業した私を待っていたのは転勤命令であった。行先は上閉井郡栗橋村橋野中学校（現 釜石市 橋野町）という所である。弥栄中学校の校長は約束を守り、発電所が三カ所もある村を選んでくれたのである。これで電気の心配はなくなった。ここは日本最古の西洋式反射炉で採鉱から製鉄まで一完生産した有名な大橋鉄山のある所で、今にその遺跡が残されている。

しかし、ここはまた途方もない山奥であり、遠野からバスで二時間、釜石からもバスで二時間という僻地の代表のような場所である。熊が多く出没し毎年何人かが熊に襲われ大怪我をするので有名な地でもある。

私は遠野からバスに乗り笛吹峠を越して来たのであるが、当時の笛吹峠はバス一台がやっと通れる広さしかなく、もう一台とすれ違う際はどっちかのバスが何百メートルもバックして広場を探すのである。しかも、窓の下には道路が見えず百メートルを越すような崖がすぐ下に見えるから、高登りの大好きな私でさえ肝を冷やしたのである。やっとのことで橋野中学校にやってくると学校の背後を橋野川が滝となって爆音を上げて流れており、その水音で騒々しいったら話にならない。

この橋野中学校の校長先生は田村という人で小学校の校長も兼務されており、この地方きっての名校長として名の高い方であり、なんでも二十八才の若さで校長になったということである。豪放磊落な方で加えて大の酒豪であったから、忽ち私は校長先生のお気に入りとなり、お蔭で学校生活にもなじむことができた。どうやら私は酒呑みで豪放であり、余り細かいことにこだわらず、どこか間の抜けているような人と気が合うようである。だから弥栄中学校長のような真面目人間とを性が合わないのである。

宿直室に泊ることになり、食事は付近のお婆さんが用意して下さることになった。

歓迎会の晩にしこたま焼酎を吞まされ、ふらふらになったところで、今度はお風呂に入れとのことである。ふらつく足で風呂場に行き、やっとのことで風呂に入ったのであるが、入って間もなく天井が回りだした。そのうち風呂場全体が回転を始めた。「これは大変だ、すぐ風呂から出ないと大変なことになる、」と考え、風呂から出ようとすが何せ全体が回転しているのだから出られない。私は今でもあんなに泥酔していても思考能力があったのに我ながら感心している。つまり、こう考えたのである。

「回っていてもよいから、まず浴槽から出ることだ。」そこで、上になろうが下になろうが桶から出るべく渾身の力を奮い起し、やっとのことで桶から脱出することができた。そしてその儘ひっくり返ってしまった。しばらくして気が鎮まったので衣類を身につけ、ふらつく足で宿直室に辿りつき今度は本当にひっくり返って眠ってしまった。

この学校でも英語と体育が私の担当教科であり、一生懸命に教えたが英語はよいとして体育を教えると体がすぐ疲れた。食欲も段々と減退した。体重も次第に減って四十四・五キロになってしまった。それでも、若さにまかせて毎晩十二時過ぎまで受験勉強を続けた。実は言い忘れていたが、昔、軍隊にいた頃に何かの儀式があり、その時軍楽隊が来て演奏したことがあり、その素晴らしい演奏に魅了された私は陸軍軍隊に入隊したくなり、小林という戦友と二人で誰にも内緒で受験したことがあった。その時レントゲン写真を撮られ、『お前は軽度の肺浸潤であり、軍楽隊は無理だ。』と言われたことがあった。あの時、軍楽隊に合格していたら別の世界が開けていたよくな気がする。その肺浸潤が再発していたのである。近くの診療所で診察して貰ったが矢張り軽度の肺疾患があるので無理をしないように、とのことであった。二年間のポンプ小屋生活の無理がここにきて現われたのである。

しかし、ここでへこたれたのでは男がすたる。勇気を出して仕事に勉強にと精進したのであるが、翌年の二月頃には体重が四十二キロに迄減ってしまった。

再度、北大への挑戦である、その挑戦する身は瘦せ細り僅かに十貫目であるが、それでも意気軒昂たるものがあった。しかも幸いなことに、今年は受験場が函館だというので瘦軀に鞭打って函館へと旅立った。

今年も去年と同様に英語、世界史、国語は万点に近い点数であり物理が六十点ぐらい、そして数学は零点に近いと判断した。また、当時は相当嚴重な身体検査があったもので、むしろその方が心配であった。

今度は、この前のように嫌な易者にも会わず今度こそ合格確実と確信して橋野に戻った。そして、校長先生に多分合格すると思うので学校の迷惑にならないように三月一杯で退職すると話し、校長先生も私の勉強振りから大丈夫だろうと激励して下さい。しかし、私は国立大学というものは一課目でも零点があれば合格させないということ忘れていた。結果は今年もまた不合格であった。

絶対の確信をもった受験だったので流石に楽天家の私も完全にダウンしてしまっただけで、先生方が心配して下さったので何とかもちなおし、教壇に立ったのであるが前途は暗澹たるものであった。

四 社会事業短大の時代

そんな或る日、何気なく見た新聞に岩手県で給費生を募集しているのが目にとまった。日本社会事業短期大学に岩手県から合格したものに若干の学費を支給するというのである。早速電話で聞いてみると三月末に大学の試験があるという。しかも未だ受験締切まで間があるから、受験票を送るのですぐ手続きをしない、という親切な回答である。そして翌々日に速達で受験票が送られたきた。

大急ぎで必要事項を記入して速達で願書を送った。日本社会事業短期大学の入試は二月の二十日を何日か過ぎてのことのように記憶している。

橋野から遠野までバス、遠野から花巻まで汽車で行き、そこから東北本線の夜行列